

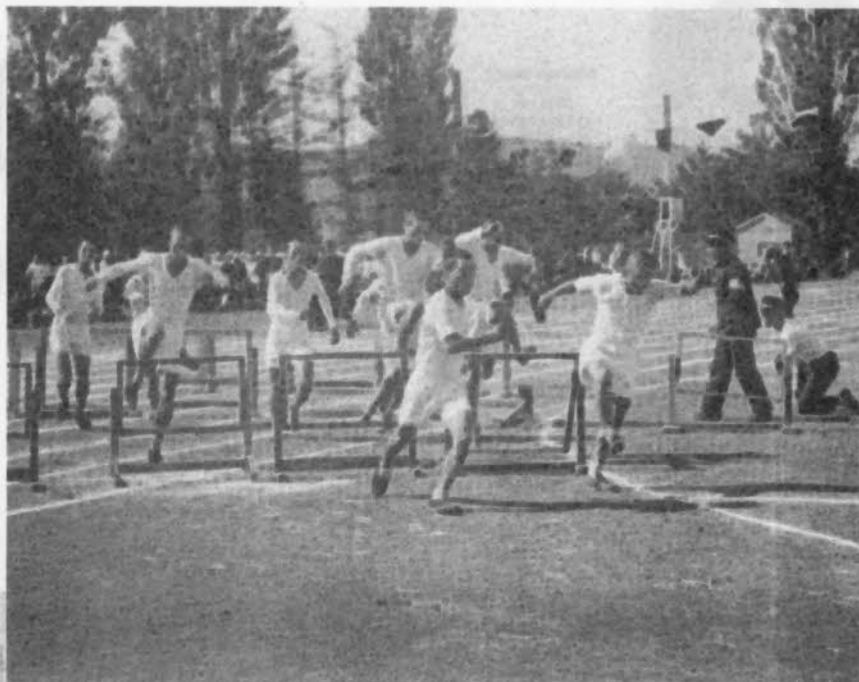
1993

高崎高校同窓会報

第27号 平成5年11月30日

発行所
高崎高校同窓会
〒370
高崎市八千代町
2-4-1
TEL
0273-24-0074





◎表紙の写真
大正期の上和田校舎正門

◎表紙裏の写真

右上：運動会風景
(昭和9年)

左上：軍事教練風景
(昭和9年)

下：校庭・テニスコート
(昭和2年)

写真提供／岩山 猛 (49回)

あいさつ

時代の流れを読む.....	同窓会会長	小山 禧一	3
新任のあいさつ.....	校長	堀口 康平	4
高岡健在なり.....	PTA会長	内田 欣治	4
伝統をふまえて創造へ.....	同窓会副会長	重田 精一	5
卒業生の作品紹介			

「イメージの水」和南城孝志.....5

特別寄稿

相続税は愛とともに.....	新井 隆一	6
徒然なるままに俳句のことなど.....	原 浩一郎	7
ファーストネーム.....	豊田 建夫	8

講堂に関する回想記

講堂の思い出.....	古山 圭一	9
講堂の思い出.....	武井 民部	9
講堂変遷.....		10

高岡高校創立百周年記念事業

百年史の編纂.....	箕輪 明	12
記念人物伝.....	植原 政明	12
百周年記念事業について.....	事務局	13

大学生からの便り

半人前のひとりごと.....	砂賀 浩之	14
相見生意気.....	長岡 義憲	14
同窓会だより.....		15

叙勲者紹介／群銀高中・高高会

投稿「あれから四十年」

母校だより

運動部.....		16
母校職員人事異動.....		17
学芸部.....		18
高岡・前高定期戦.....		18
進学状況.....		19
翠樹文庫.....		19
同窓会会計報告・予算案.....		20
新年総会へのお誘い.....		20



時代の流れを読む

同窓会会長 小山 禧一

冷夏と長雨にたたられた今年の稲の不作は残念なことには歴史的なものになってしまいました。また昨年来から引き続き、景気の低迷等社会の悪条件が重なっておりますが、同窓の諸兄におかれましては相変わらずご健勝のこととお慶び申し上げます。

会員の皆様のご理解とご協力をいただきまして、本同窓会の活動資金であります維持会費納入は年々増加をたどっておりますが、さらに多くの同窓生の賛同とご協力が得られますよう、魅力ある同窓会づくりに今後とも努力していかねければならないと、役員一同改めて決意する次第であります。

今年も、重田副会長・海老原常任理事の両先輩が秋の叙勲の榮譽に浴されましたのはじめ、さまざまな分野で同窓諸兄のご活躍を耳にすることが多いのでありますが、御同慶の至りであります。また、母校の現役生の勉学やスポーツの分野での活躍も素晴らしいものがありました。が、それらを新聞紙上などで拝見するたびに、指導にあたられる先生方のご苦労・ご努力に感謝する次第であります。今後とも地域社会、国家に有能な人材を育て続けていくことをお願い

申し上げます次第です。

さて、今年もまたさまざまな出来事がありました。奥尻島地震や長雨による災害の悲惨さは言う迄ありませんが、昨今の世界や日本の現状を見ておきますと、変化している時代の流れを読むことをせず、因習に従っていれば良しとしていると、いつのまにか時代にとり残されてしまう、そんなことを考えさせられます。「年々歳々花あい似たり、歳々年々人同じからず」と申しますが、少しずつ世の中は変化しております。

しかしまた、社会の変化に追随してばかりおりましたら、主体性のない付和雷同の人になってしまいます。そこで理想を持つことが大切になってくると思います。国家・地域社会・職場・家庭と対象はさまざまでしょうが、その未来の理想像をどのように自分の中に用意するか、それが大切なのだと思います。これがないと、ただ時代に翻弄されるだけの人間に墮する危険があります。生涯学習の重要さがそこにあるのだと思います。

そしてそこに思い及ぶ時、若いとき培われた学ぶという姿勢が大切なのだと痛感する次第で

す。いまさら言うまでもございませんが高中・高校で学んだことが現在のわたしたちの核心をなしていると思うのであります。

その母校も、いよいよ百周年を四年後に控えました。去る六月二十一日の理事会で決定されました百周年記念事業は、同窓記念館（仮称）の建設と指月庭・校門の整備、そして百周年記念史の発行であります。前年度の同窓会報（第二十六号）でも申し上げさせていただきましたが、この一大事業は、二万一千余の高中・高校の同窓の諸兄が、力を合わせて実現していくことに深い意義があると思います。母校創立百年という大きな節目に巡り合わせたことを意気に感じていただき、同窓諸兄の深いご理解と暖かいご支援をお願いいたします。

ところで、すでにご承知のことと存じますが、大先輩であります井上房一郎翁が、七月二十六日九十六歳の天寿を全うされました。他界なされました。井上先輩の母校高高への愛情と献身とは同窓生の遍く知るところであります。芸術と哲学を尊重し、高崎高校のためのみならず、高崎市、群馬県のためにと、地域の文化向上にご尽力致しておられました姿は、わたしたち同窓生の等しく仰ぎ見るところであります。今ここに会員の皆様とともに、井上房一郎翁のご冥福を衷心よりお祈り申し上げたいと思います。

以上、誠に言葉ととのいませませんが、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げますとともに、同窓生各位の益々のご発展とご健勝をご祈念申し上げて、挨拶と致します。

（美峰酒類取締役社長 42回）



新任のあいさつ

校長 堀口 康平

高邁な識見と卓越した指導力をもって母校の充実・発展に心血を注がれ、幾多の成果を残された金井秀一前校長先生の後任として、富岡高校から着任しました。創立を同じくする兄弟校とは言え、本校は輝かしい歴史と伝統を有する県下の代表校であり、その責務の重さをひしひしと感じておりますが、微力ながら心を新たに努める所存であります。

同窓会の皆様におかれましては、日頃からの物心両面にわたるご支援のみならず、創立百周年を迎えるに当たっては、素晴らしい記念事業等をご計画いただき、衷心より感謝を申し上げます。学校としての体制作りも「百周年史」編纂を中心に着々進んでおりますので、今後とも特段のご指導ご支援をよろしくお願い申し上げます。

さて、母校の近況につきましては、「母校だより」等に詳述されておりますが、大学進学・部活動等の成績は、昨年に比べ大きく前進するなど、着実な歩みを重ねております。特に、今春の七割を超える大学現役合格率、県高校総体総合四位などの成績は、県下に誇る素晴らしいものであります。これも、同窓会をはじめ関係の皆様方の暖

かいご支援の下、「当たり前の事を当

たり前にできる人間の育成」を指導の基本に据え、勉強も運動も県下一を目標とした金井前校長以来の教職員の一一致した指導の成果と確信しております。

過日行われた恒例の対前高定期戦でも、連敗の汚名を雪ぐには余りある大勝を成し遂げました。当初は盛り上がり欠ける面もありましたが、終わってみれば、部活動・一般ともに完勝、改めて「高生」の意地と底力を見せられ、意を強くしたところであります。

ご案内のように、高校教育は大きな変革期にあり、家庭科の男子必修等の課題を抱えた新教育課程も、来年度からは実施に移されるなど、その前途には多難なものが予想されます。しかし私共は、高生生の可能性と陶冶性に大いなる期待をかけ、伝統の「文武両道」「三下精神」の旗を高く掲げ、百年という大きな節目に向け、全力投球で高崎高校の充実と発展に努める覚悟であります。

終わりに、皆様のより一層のご支援・ご助力を重ねてお願い申し上げますとともに、高同窓会のいよいよの発展をご祈念申し上げあいさついたします。



高高健在なり

PTA会長 内田 欣治

PTAの会長も三学期を残すだけとなり、肩の荷もいくらか軽くなってきました。肩の荷が軽くなったのは、何

も残り期間が短くなったからではなく、事業委員会・セミナー委員会・広報委員会として各学年委員会の委員の人達が、高々PTA活動を支えていることを実感しているからです。

尚事業委員会では、今年は地区懇の代わりにマナーアップ運動を推進し、交通安全意識の高揚に取り組んでいることを御報告致します。

さて、去る十一月五日三学年の学年集会が開催され、学校の先生方から国立理系・文系・私文等大学入試の動向の説明会がありました。三〇〇名を超える父兄が出席し、熱心に先生方の説明に耳を傾けている光景にビックリ致しました。

PTA行事に対する父兄の参加の多さに驚かされたのは五月七日のPTA総会が最初でしたが、一学期に行われた各学年懇談会、二回行われたPTAセミナー（第一回大学合格への道―講師井崎公勢氏、第二回受験生の健康管

理―講師関敏克氏）も多数の参加をいただき大変好評を博しました。

学校の先生方の熱意は勿論ですが、我子に強い関心を抱き、機会があればそれを逃さず父兄らも情報を収集し、学ぼうとする姿勢には頭が下がります。こういう光景は、高高ならではののだろうと感じたのは私一人でしょうか。

ともあれ今年も残り少なくなってきましたが、三年生の生徒は大学入試も秒読み段階に入り奮闘されていることと思います。健康にはくれぐれも気を付けて、来春には全員が吉報に接することを祈り致します。

（弁護士 61回）





伝統をふまえて創造へ

同窓会副会長 重田 精一

平素、同窓会諸兄の本会に対するご支援、ご助勢に感謝いたしております。ご高承のごとく、母校創立百周年の記念事業の推進を計るべく、母校と同窓会との連携を密にして、着々と準備に入っている次第であります。

私の属する三十八期は、昭和九年に上和田台上の群馬県立高崎中学校（現在高崎市立第一中学校の所）に入学。

昭和十三年十二月、現在の乗附の地に移転。師走の寒風の中、全校生が一丸となって荷物を運び、昭和十四年一月から、新しい校舎での生活が始まりました。四十日位して卒業してしまっただけであります。当時のグラウンドは、朝は霜柱をサクサクと踏みしめ、陽がでると霜柱が溶けて泥んこ、履いている靴をとられてしまうようなところでした。講堂などもなく、卒業式は生徒控所であったように記憶しております。

高崎高校沿革概要によれば、昭和十四年十一月に武道場落成。昭和十五年五月に講堂落成となっておりますが、昭和十六年の新年拝賀式には、当時の

大学、旧制高校、高等専門学校などの在学先輩が多数参加され賑やかであったことが、なぜかなつかしく思い出されるのも、その後の暗い戦中生活の故でしょうか。

その講堂も建築以来五十有余年を経て、老朽もはなはだしく、去る八月に解体されるにいたしました。

鬼瓦などの若干の記念になるものを残して整地されている姿をみますと、なにか一つぬけてしまったような感じで感無量であります。

整地された講堂跡は、百周年記念事業のメインとしての同窓会館建設が計画されておりまして、新しい発展の道を模索しております。

高崎中学校、高崎高校を通しての伝統の重みを直視しつつ、新しい創造への展開をと念じておりますので、同窓諸兄のご健勝を祈念するとともに、今後ともご支援の程をお願い申し上げます。

（重田医院 38回）

●卒業生の作品紹介●

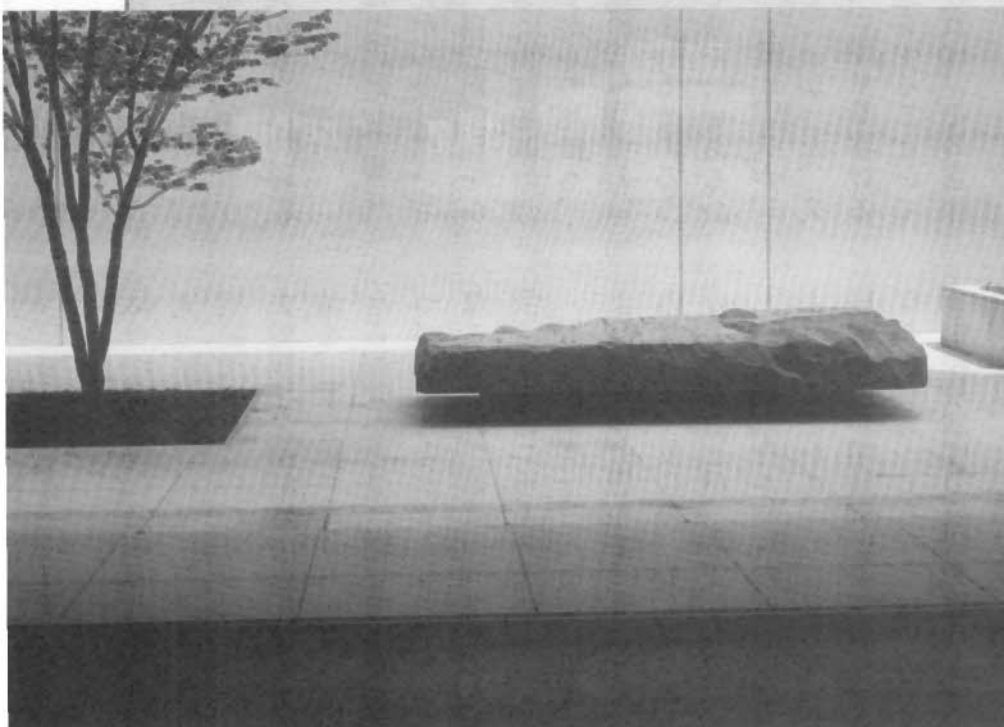
イメージの水

わなじょう 和南城 孝志

群栄化学本社の細長い中庭の空間は、水平軸と垂直軸の二本の軸で構成されている。水平軸においては、平たい石彫と一本の樹木、両コーナーに熊笹が配置された。

この黒い火崗岩の彫刻は、石の自然の素材としての特性—神秘性を生かすための最小限の加工がなされており、それは静かに流れる水表現する。空想の水はその表面をうねるような波紋を残しつつ落下し、周囲の樹木を育む。

（彫刻家 67回）



相続税は愛とともに



新井 隆一

る人びとが相続ということを経機に、相互に確かめ合うことができることになる象徴的な機能をもつものである。

したがって、人びとは、その社会的仕組みを十分に活用し、この機能を完全に発揮させるためには、相続の具体的な内容と方法とを、それに適合するように、工夫をし、計画をし、それにもとづいて、相続を実現するようにしなければならぬのである。

しかし、その際に、忘れることができないもの、忘れられてはならないものは、いうまでもなく、相続税の存在である。

そしてそのとき、相続税を賦課されるべきもの、納付しなければならないものとはかり考えるのではなく、相続を、より実効のあるものとして展開するために、相続税の制度を積極的に利用し、活用するというところに目を向ける必要がある。

相続というと、財産を受け継ぐことというように、物や権利などのことばかりが注目されているようである。

しかし、相続は、単なる物や権利な

どの人から人への移転ではない。

相続は、夫から妻に、妻から夫に、親から子に、など、愛と血のつながりに根ざした、財産の人から人への移転なのである。

夫は妻に対し、妻は夫に対し、親は子に対し、自分が祖先から受け継いできた財産を引き渡し、自分が生涯をかけて稼得し蓄積してきた財産を譲り渡すことによって、みずからの死後も、妻が、夫が、子が、経済的なうらおいを得、ゆたかさにめぐまれるであろうことを希求して死んでゆくのであるから、相続は、相続をした妻が、夫が、子が、財産の相続をしてよかった、夫から、妻から、親から、幸せを享けることができた、と実感することができるといふものでなければ、その意味がないのである。

相続は、愛につつまれた財産の引き継ぎであり、愛をこめた事業の継承なのである。

相続は労なき財産の継承であるとか、高額の相続財産の存在は資本主義経済のひずみ現象であるとか、死に際して人は生涯の税負担の精算をしなければならぬとか、そして、富は再分配をされなければならないとか、などなどの理由をあげて、相続税は重く課されるべきであるなどという主張が、しばしば、多く聞こえる。

しかし、相続税の納付のために、愛

につつまれた愛にこめられた相続財産を売り払わなければ、物納をしなければ、相続税の支払いができない、そして、夫婦親子兄弟姉妹で永年住んできた土地を、家を離れなければならない、親から祖先から受け継いで事業を維持しつづけることができない、というようなことでは、相続の制度そのものが慟哭をするというものである。

相続税制度は、人びとに相続をしてよかった、と思わせるような、財のみならず、愛にも、心くばりのあるものであることが、必要なものである。相続税制度が相続制度を崩壊に導くようなことがあってはならないし、相続税制度が相続制度を空洞化するようなことがあってはならないのである。

相続税制度の現状を思うとき、相続税制度は、一日もはやく相続というところを、より意義あらしめるように、改革をされなければならないというものである。

そのためには、とりあえず、基礎控除を、思い切って大幅に引き上げること、税率を引き下げること、そして、時と場合によっては、超改革を断行して、相続税制度そのものを廃止してしまふこと、である。

(法学博士／早稲田大学教授／財団法人日本税務研究センター常務理事／税理士審査会懲戒審査委員／租税法理事／日本税法学会名誉会員 46回)

徒然なるままに ～俳句のことなど～



原 浩一郎

僕が高々に入學したのは昭和二十九年でありますから、かれこれ四十年の歳月が過ぎようとしている訳であります。当時、漢文の先生に鈴木先生という今でも忘れられない恩師がおられました。あだ名を「うらなり先生」といっておりましたが、当時通学用に履いていた高下駄のカラコンロンという音と、そのうらなり先生の飄々たる語り口が妙にマッチして、今でも耳に残っております。そのせいかすぐ漢文が好きになりました。一通りかじった末に中国から日本に舞い戻り、今度は短歌・俳句に興味を持ち、石川啄木、高浜虚子などの本を読みあさったのを覚えています。もっとも短歌については親父が

やっていたもので、門前の小僧的に中学時代に短歌会なるものを作り、旺文社の月刊誌に投稿などしておりましたが、親父に比較されてはかなわないという潜在意識があったかどうか定かではありませんが、ぶつり止めました。自分で俳句の実作をする様になるのには高校を出てから十七年の歳月を要しました。ロータリークラブで吉村ひさ志先生に出会えた時であります。踏む音の独りの時の登山靴

山の日染めあげられし赤蜻蛉
ががんに命軽しと思ふ夜
などの句に熱中しました。すぐにひさ志先生を中心に句会を作りました。総勢二十六名の金曜句会が今に続いております。高次の同窓先輩の中で俳句という中曾根元総理に触れない訳にはいかないと思います。東大在学中から俳句の実作を始められ、昭和六十年現職総理の年に「中曾根康弘句集」を上梓されました。一国の総理として、調子の張った素晴らしい句に深い感銘を受けたのを思い出します。中でも昭和五十八年の広島平和記念式典（八月

六日）に参列された時の六句が特に脳裡に残っております。

亡き父母を呼びかい鳴くや蟬しぐれ
関ヶ原ささぐまた熱き日のめぐりきて
炎天へ雲火憤きたち原爆忌

亡き魂のいぶきか炎ゆる夏の雲

悲しみの夏雲へむけ鳩放つ

幾千の鳩舞いあがる聖ドーム

二句目の「関ヶ原ささぐ」の句は当日の総理式辞の中で披露されたのを今でも忘れません。繰り返しても尽きる事のない平和へのアピールと、犠牲者への弔意が「まためぐりきて」という一語に凝集されていると思います。

ちなみに一句目の「蟬しぐれ」の句は他に、

くれてなお命の限り蟬しぐれ

があり、これは人口に膾炙された句であります。「あとがき」の中で「この俳句作りは私の生活に大きな潤いと共に沢山の恩恵を与えてくれました。どんな時でも、触れるもの、目にみえないものについてさえも、常に感じとろう、掴み出そう、そして正直に表現しようという生き方と根氣を与えられました。又それは私の仕事である演説にも大変役立ちました」と記されています。

目に見えないものについてさえも常に感じとろうという姿勢は俳句のみならず芸術・文学の共通の目的意識であるらしく、千円札の顔となった夏目漱

石や、芥川龍之介などの小説家も優れた俳句を残しています。松尾芭蕉や正岡子規、高浜虚子他の著名な俳人達に較べ目に触れる機会が少ないと思うので披露します。漱石の句に、

腸に春滴るや粥の味

有る程の菊な抛入れよ棺の中

という句があります。一句目は生来胃腸の弱かった漱石が胃潰瘍の吐血を繰り返して、やっと粥を許可された時、二句目はやはり胃腸病院に入院中の句。自分が死んだらあるだけの菊を棺に投げ入れよと生への執着を詠っています。龍之介の句に、

水漬や鼻の先だけ暮れ残る

という句があります。龍之介が鼻という当時の教科書にも出ていた小説「鼻」がすぐ思い出されます。主人公の禅智内供の鼻とこの句の鼻と相關図は定かではありませんが、龍之介自身はこの句が大変気に入っていたらしく、よく短冊に書いていて、自殺した龍之介の辞世の句という人もいます。

ちなみに松尾芭蕉は「奥の細道」紀行の最北端の地、秋田県の大湯で、

象潟や雨に西施がねぶの花

という句を詠んでいます。この象潟は下から読むと「たかさき」と読めますが何の関係もないでしょう。これはまったく蛇足です。

（原株式会社・働くんべい社長 56 回）

ファーストネーム



豊田 建夫

国際交流、国際親善と名付けられた活動が盛んである。しかし、国際親善や相互理解といっても、結局つきつめれば一人一人の人間の交際の積み重ねである。外国人とのパーティなどではスポーツ選手の活躍が格好の話題となる。ゴルフの青木選手や岡本綾子選手の活躍などは在米日本人など感謝してもし過ぎることはあるまい。郷に入っては郷に従えという。だが、海外にあって、相手の長く培われた生活習慣に合わせて生活することは、なかなか難しい面がある。

*

今から約一〇年前、米国の大学に一年ほど研究の機会を与えられた。大学

での研究に入る前に、ネバダ州リノにある米国全州裁判官研修所での一週間ほどの研修に参加した。サンフランシスコからバスで約六時間、途中絵のように美しいタホ湖を横に見てネバダ州第二の都市リノに到着する。ここはキャンブルでも有名だが、ネバダ大学リノ校の広大なキャンパスがあり、その一角に裁判官研修所の建物があった。州裁判官研修所と

いっても、その性格は、フォード財団などの寄付により施設建築や運営がなされる純然たる民間機関である。したがって参加者も大半がGパンにTシャツといったラフで気楽な格好であった。米国人は多数の集まりなどがあると、すぐにお互いをファーストネーム（氏名のうちの最初の名前の部分）で呼び始める。それが親愛のしるしのわけである。あいさつでお辞儀というのはない。初対面では握手して自己の姓名を名乗る。次回からは道で会っても、ロン・ヤスの関係で言えば、

「Hi, Yasu, how are you?」

「Fine, and you, Ron」

という具合である。

困るのは、この挨拶がいろいろな言い回しがあることだ。

「How are you doing?」

「How are you going?」

「I is everything well?」

「What's new?」

「What's up?」

（ツアと聞こえるが、「何か変わったことは?」の意）等々。

私など最初のうちHow are youしか習っていない身には、他の挨拶が咄嗟に理解できず、返事をしようと思うと相手はもう五メートルも先を通り過ぎた後だったということがザラだった。

また、多数の米国人のそれぞれのファーストネームを覚えるのも一苦労である。大体欧米人のファーストネームは洗礼名とも言われるように、聖書の中の人物やローマ、中世の偉人からとった例が多い。だから彼等にとって日本では、信長、秀吉、家康という具合に小さい頃からなじんだ名前が多く、それ故あれほど短時間に多数のファーストネームを覚えることができるのだろう。また、顔で識別できればいいが、最初のうちはどの外国人も同じような顔に見えるものだ。ともかく、この最初の道で出会った際などに相手の目を見ながら気楽にファーストネームで呼び合い挨拶ができるようになればしめたものだが、そこに至るまでがなかなか骨の折れる一関門である。

*

かつて、マッカーサーが帰国後間もなく上院で「日本人十二歳説」を唱えて、物議をかもしたことがある。しかし、それも演説の前後の文脈をよくみれば、選挙や議会などの民主主義的制度の歴史において、ドイツやアメリカを四、五十歳とみれば、日本は十二歳程度の段階としたもので、日本人の資質自体を軽侮したものではない。むしろ、勤勉、努力、正直などの面で彼は日本人に大いに敬意を払っている。

現在は英語が世界を席巻している。それは政治、経済、軍事、学術、産業など多くの面で米国がリーダーシップを握っているからである。かつては、それがローマであり、ポルトガル、スペインであり、英国であった時代があった。いずれ百年後、二百年後にそれが日本である時代がくるかもしれない。それにしても、在米中会った多くのアメリカ人は、一人一人が、職業の如何にかかわらず、自信満々という印象を受けた。我々としても、いたずらに臆せず慌てず、自国の歴史・文化に誇りを持ち、正々堂々外国人と接したいものだ。

（浦和地裁判事 66回）

講堂

に関する回想記

講堂の思い出



古山 圭一

百周年の記念事業のため、とりこわされる講堂にまつわる話を、書いて欲しいとの依頼ですが、四十年以上も前のことなので、特別に思い出することは、我々高高三十三回生が入学した昭和二十六年四月の少し前に、校舎が火事のため焼けたので、現在の音楽センター近くにあった高崎十五連隊の兵舎で一年過ごした事は忘れ得ぬ思い出である。

兵舎の半分を我々が教室として使用し、残りの半分を天田ドレスメーカー女学院という洋裁学校が使用していた。我々は二階の教室から派手な支度をした洋裁学校の学生が通るのを、休み時間に眺めながら、ひやかした事がよくあった。冬になると体育の授業はラクビーがほとんどで、試合中に洋裁学校の学生が通るとつい目が行ってしまったものである。教室は兵舎を改造したもので、一教室に三カ所の立窓で薄暗くて間仕切りも板張りのため隣りの授業がよく聞こえた。

勉強のための環境はあまりよくなかったが、駅からも近く通学に便利であったし、おしゃれデパートを中心とした中央銀座通りに近く、映画を見たり遊ぶのには便利な場所であった。二年になると校舎が完成し、乗附の校舎に通学するようになったが、前に比べて距離の長さを痛感した。

講堂の思い出といえば、ある時演劇が上演され、化学の山本先生（アダナはエーカー）が見ている近くで、東北弁のエーカーというセリフがあつて大笑いしたことや、N響と群響の合同演奏で、ベートーベンのピアノ協奏曲第三番を聞いた記憶が残っている。

他の高校は体育館で行事を行っていたが、高崎は講堂があつたので、床に座ることなく常に椅子に座って聞くことができたのはよかった。

木造建築物としても比較的よくできていた講堂が、とりこわされるのは卒業生にとっては、思い出の建物を失うわけで、何とか保存することを要望してやまない。

（側古山建設会長 53回）

講堂の思い出



武井 民部

「先日、老朽化した講堂がとり壊されました。そこで講堂にまつわるお話を」との原稿依頼を受け、百周年記念事業の関連とはいえ、母校との思い出を繋ぐ最後の建造物が地上から消えてしまったことに深い寂寥を感じた。そこで、その跡を確かめたい思いに駆られて母校を訪れた。重厚で、屋根の反りが強い東玄関の跡だけが、はみだした、まったくの長方形の更地になっている。しかし、かつて、あの威風堂々として、約千名の我々高崎生を易々と呑み込んだ講堂の跡地としては、あまりの狭さに一瞬目を疑った。

我々昭和二十七年入学学生にとって講堂は、まさに高崎への龍門であった。

講堂に四百近い机を並べて入学検査が行われた。昭和二十六年一月の火災後の復旧工事が間に合わなかった為であったが、一堂に集められた受験生の数にまず圧倒され、さらに富田俊一先生の大音声に度胆をぬかれた。あの受験場の広漠さが、跡地を狭小に感じさせているようだ。しかし、不思議に思うのは、お互い緊張して受験していた近くの者が、遠く草津中から来た小林敬君（古久長旅館）はじめ、その時から大の親友になっていることだ。後に我々のリーダー的存在であった田端穰君（吉井高教頭）が、さくく話しかけてくれ、リラックスできた為であった。入学してからの講堂は、我々にとってまさに哲学堂であった。我が国の各界を代表する人々が来校し講演会が開かれた。特に前年度着任された田中悦平校長が十月に「高校生の倫理—3F精神」を説かれた三年次は、四月、谷川徹三「平和の問題について」、五月、赤尾好夫旺文社社長、十一月、清水善造、武者小路実篤「自然と人生」といった豪華な顔ぶれであった。特にポーターレスを説いた谷川徹三の世界連邦の思想と、訥々と語る武者小路実篤の人生の真実に深い感銘を受けた。

我々を入学検査の精神的圧迫をもって迎えた講堂は、また、我々を精神の糧をもって育んでくれたように思う。

（浜川高校教諭 54回）

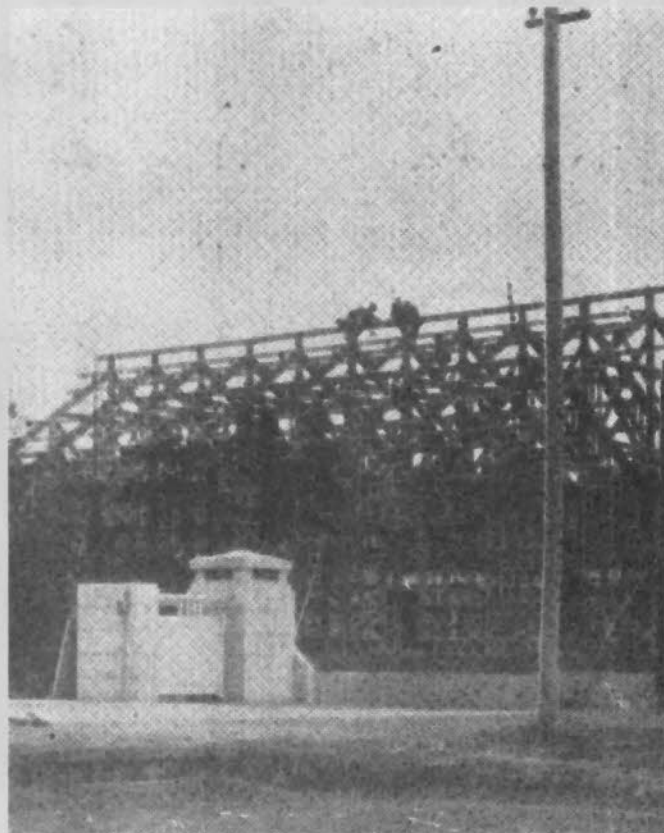
講堂変遷



落成（S15年5月31日）



正門と講堂（S15年）



新築中の講堂（S14年）



当時の講堂内部



講堂にて映画会（S15年ごろ）



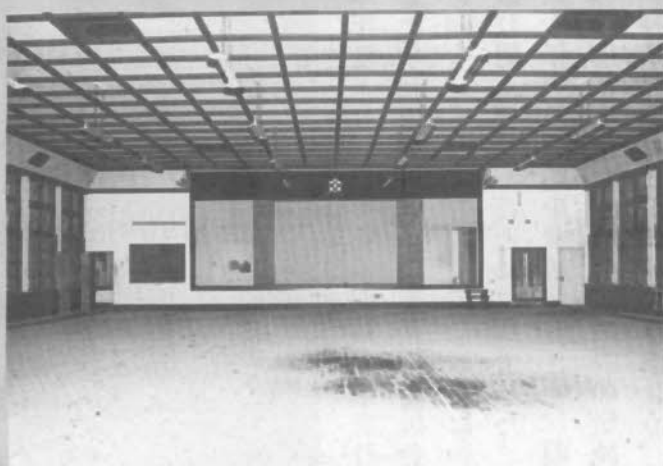
昭和61年



創立60周年記念式典（S32年）

威風堂々

古色蒼然



解体直前の講堂（H5年）

寂々寥々



解体作業開始（H5年8月）



跡地



鬼瓦

百年

高崎高校創立百周年記念事業

百年史の編集

本年度より、百年史の編集が始まりました。同窓会百周年事業実行委員会の意向を受けて、高崎職員が一丸となって取り組んでいくことになりました。八十年史の記述を継承発展させ、編年体の体裁を生かしつつ、高崎の伝統的精神の発露たる記念誌になるよう、編集委員（編年部二十二名・列伝部三名）が力を合わせて、立派なものをつくり上げていこうと活動を始めた所です。

編年部委員長 箕輪 明（国語）

副委員長 関根 正史（社会）

同 富沢 栄世（数学）

資料係長 田嶋 亘（社会）

列伝部委員長 植原 政明（社会）

以上の五名の同窓教員を中心に、組織を構成し、具体的活動として、まず八十年史のよみ返しと資料の収集を始めました。

編年部については、八十年史と九十年小史を下敷きにして、記事を精選・追加し、よりビジュアルで読みやすい内容にしていきたいと考えています。

そこで、同窓生の皆様に、資料のご協力をぜひよろしくお願いしたいと思います。青春時代の懐かしい思い出につながる写真・図版・プリントなどの見てよくその当時の様子がわかる資料をぜひ借用したいと思っています。郵送していただければ幸いですが、貴重な資料ゆえ手元から離したくないと思われる場合は、高崎にお電話かファックス、またお手紙をいただければ、委員がお伺いして、コピーなり写真のとり直しをさせていただきたいと考えております。ぜひとも宜しくご協力ください。

（百年史編集委員長 箕輪 明 70回）

記念人物伝

同窓会の方から「高崎百年史」として今までのような編年体形式だけでなく、「九十周年小史」の人物点描を別冊にまとめて人物列伝を作ったかどうかという打診があり、同窓会役員の方々と相談の上で、以下の方々を選し、「百年史人物列伝」編集委員をお願いし、快諾をいただきました。

●編集委員

内山 信次 42回

立川 栄	46回	岩山 猛	49回	森田 秀策	49回	石原 征明	50回	田嶋 桂男	51回	持田 章	51回	武井 民部	54回	田端 穰	54回	吉永 哲郎	54回	村上 幹也	58回
------	-----	------	-----	-------	-----	-------	-----	-------	-----	------	-----	-------	-----	------	-----	-------	-----	-------	-----

（百年史編集にあたっての） お願い

◎高中・高々時代の懐かしい、当時の様子がよくわかる写真・図版などがございましたら、ご連絡ください。

高崎 電話 0273(24)0074

FAX 0273(24)7712

（係職員／箕輪・関根・富沢・田嶋・植原・矢島）

七月十九日「魚仲」で第一回百年史編集委員会が行われ、それぞれの立場・視点から編集方針が述べられ、それぞれの意見を集約して、次回の編集委員会において編集の方向を決めていくことで散会しました。

その後、編集委員の森田氏から専門家の立場で貴重なアドバイスをいただき、高高校内の百年史編集委員長箕輪氏と私が校史編集のために十月十二日から十三日、長野県下の五つの高校を視察して来ました。松本深志高校においては創立百周年記念誌として、物故者二十九名を取り上げ「深志人物誌」を刊行しており、百二十周年記念として人物誌パート二の刊行を予定しているとのことでした。本校の人物列伝に大いに参考になる内容でありました。

この長野視察の報告をかね、十月二十九日本校において第二回百年史編集委員会が行われ、編集の方針の話し合いが行われました。

百年記念誌の刊行にあたり、貴重な資料、また人物列伝等に意見がありましたら、母校にご連絡頂ければ幸いです。今後資料収集等で同窓の方々にお世話になると思いますが、よろしくお願い致します。

(文責 植原 政明 69回)

百年事業に 記念誌について

平成九年六月上旬(予定)の高崎高校創立百周年記念式典にむけて、その記念事業の内容がほぼ決定いたしました。

まず同窓記念館(仮称)ですが、これは全館冷暖房完備です。後掲の平面図にございますように、一階では学年分約四百名余が入れる多目的ホールが作られます。そこは学年の集会や、PTAの集会、あるいは小演奏会・演劇会などにも十分利用できるように、ステージをかなり広く取ってあるのが特徴です。椅子は固定式ではなく、必要に応じて収納庫から出して使うことによって、集会以外の場面でも使えるように考えられています。また、同じ一階には同窓会の資料室が設けられています。ここには高崎高校の歴史を語るさまざまな資料を永久に保存管理できるように、陳列台や書庫などを設けて整理し、必要に応じて閲覧調査できるようにします。

二階には、百名(二クラス程度)の生徒が入れるような大教室が作られます。

す。これは補習授業などで利用され、生徒の学力向上に力を発揮するでしょう。

さて次に指月庭と校門の整備ですが、これは両方合わせて計画されています。と申しますのは、ご承知の通り、本校の正門とそれに向かって直進してくる東側の道路とが少しずれています。そのため、自転車が入るときに道路を斜めに横切ることが多くなり生徒が危険にさらされます。生徒の安全のために校門を少し広げて直進したまままで校内に入れるようにしようというものです。その校門から入ってすぐのところにある指

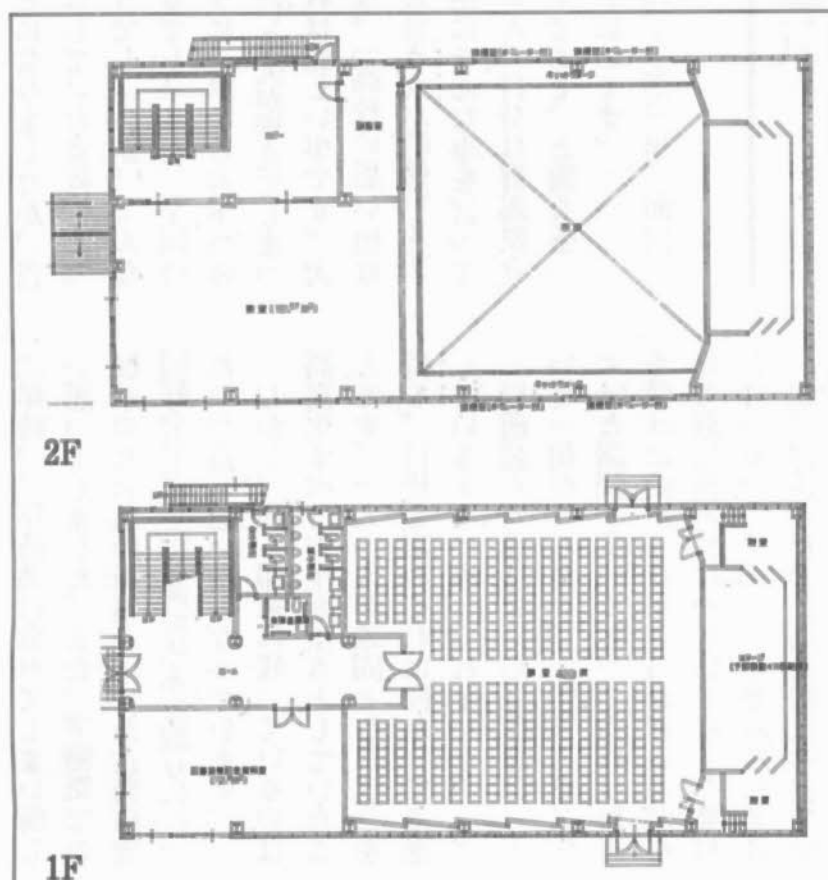
月庭は、校門とのバランスを考えて設計されなければならぬでしょう。また、広くなる校門にふさわしいデザインの間柱が期待されます。なお、校門の拡張工事等については、県の方で費用を出していただけるように交渉中です。

次に計画されていますのは百

周年記念誌の発行です。これはB5サイズで上・下二巻の体裁を持ちます。上巻は編年体の通史で、一千ページを目標にされています。下巻は高・高同窓生の人物伝になり、五百ページ程度を予定していますが、これは今の学校の歴史にないユニークなもので、高・高同窓生の紹介発掘をめざし、高・高同窓の青春群像を長く世に伝えていくことを狙いとしております。

以上十一月二十四日の理事会で承認された記念事業のあらましについて、簡単に説明いたしました。

(同窓会事務局)



大学生からの便り

半人前のひとりごと

砂賀 浩之

今、私が住んでいる町で、部活動に励んでいる高校生を見かけると、「自分にもそんな時があったなあ」と、ふと高高での三年間が頭に甦ります。

高校時代は仲間達と一緒に、勝つことを目標にして部活に励んでいました。特に人より才能があった訳ではないのに、他の高校や他の部員達に負けたくなかったのも、人一倍努力したつもりです。そのお蔭で最終的には自分の満足できる結果を残すことができました。当時の友人にはしばしば、負けん気が強いとか、すぐムキになるとか言われましたが、「やるからには自分が満足できるまでやりたい」、「絶対に勝てないような時でも、無駄な努力のようでも、格好悪くても、諦めずに精一杯やりたい」と思い続けていました。しかし、最近はこの気持ちが少し薄れて来たようです。というのは、私の大学の

友人にはクールな人が多く、高校時代のようにやる訳にはいかないからです。そうこうしているうちに私もだんだん雰囲気馴染んで来てしまったようです。実験、レポート、部活に追われる現在の日々は大変忙しいですが、充実しています。それでも、自分の感情をむき出しにできた高校時代が懐かしいです。たとえ自分の運命を左右する神様のような人からの命令であっても、自分が納得できないことは受け入れない、という姿勢が採れなくなった今の自分を情けなく思う時があります。結



左側砂賀（インターハイで負けた直後）

局受け入れることになりましたが、自分達の意思表示はしていたと思います。現在の高高はどうでしょうか。こんな校風が残っているのでしょうか。全国の他の進学校のように、単なる大学への通過点だと考えている人が増えてしまったとしたら、それは悲しい事です。大学の友人の中には、「高校の思い出なんか何もない」と言う人が結構います。私は高高的卒業生にそんな事を言っていて欲しくありません。自分は群馬県立高崎高校の卒業生である、と胸を張って言って欲しいと思います。

（慶應義塾大学理工学部三年 90回）

相見生意気

長岡 義憲

今、私は高高時代のような充実した生活を送っています。大学での講義、サークル活動等、自分にとっては真新しいものばかりで様々な事に挑戦してみようと考えています。そんな時に高時代の回想を書いて寄せてほしいとのことなので、これを機会に高時代を振り返ってみたいと思います。

思い出は数多くあります。高前定期戦、翠鰭祭、各種競技大会等々。高前定期戦は一年の時には勝利しましたが、

二年時、三年時共に敗れてしまい悔しい思いをしました。また、翠鰭祭での展示のため私の所属していた古典研究同好会で万葉の歌碑の拓本を取りに行ったのが良い思い出となっています。

しかし、最も印象に残っているのは高生すべてが生き生きとしていたことです。一人一人が確固とした信念を持ち、目標を定めそれに向かって邁進しているように感じられました。

以前読んだ漢詩に「相見生意気」という一句があります。「相見て意気生ず」と訓読するのですが、これは科挙を受けに向かう青年達がお互いの顔を見て意気盛んになっている様子を描写しているのです。この句を読んだときに頭に浮かんだのが高時代時代の自分でした。周囲の人々の能力の高さに驚かされましたが、またそれが自らを高めんとする刺激にもなったのです。高高では先生方を含めて、皆がよい意味で刺激し合い、共に向上しようとする意志を持っているように思います。ここに、三下精神の最初にファイティング・スピリットが挙げられている所以があるように思われます。

さて、とりとめもなく思ったところを書いてきましたが、母校高崎高校のさらなる発展を祈念して終わりにしたいと思います。

（東京大学教養学部文科三類一回生

同窓会だより

叙勲者紹介

平成五年に叙勲された同窓生、恩師を御紹介いたします。現在判明した方々を載せておりますが、他にもいらっしゃるかもしれません、ご連絡ください。

〈昭和六十二年〉

勲四等旭日小綬章

高橋 績二氏 (26回)

〈平成四年〉

勲五等双光旭日章 (へき地衛生保健功労)

山田 信男氏 (31回)

〈平成五年〉

勲三等瑞宝章 (保健衛生功労)

重田 精一氏 (38回)

勲三等瑞宝章 (財務行政事務功労)

松本 亘司氏 (41回)

勲四等瑞宝章 (厚生保護功労)

海老原英吉氏 (33回)

勲五等双光旭日章 (保健衛生功労)

原 忠義氏 (33回)

勲五等瑞宝章 (教育スポーツ振興功労)

岡田 由重氏 (旧職員)

群銀高中・高高会

堤 克政

群馬銀行に働く高崎高校卒業生の集まりは「高中・高高会」と称し、規約もなければ会費もなく、幹事の突然の招集で参集し、会合がもたれても当然会計報告もなく、群馬銀行に籍を持つ同窓であるというだけで集まり、酒を酌み交わしています。

サラリーマンの世界は、十年二十年と経つといろいろ立場が出来てきますが、この会では、一般的に銀行内の規程となる何年人行か、職位はということは一切関係なく、何年卒業か、第何期かということが序列? となり、何のわだかまりもなくタイムスリップすることが出来る愉快な集いとなっています。

極めて楽しい集まりなのですが、幾つか悩みがあります。一つは同窓生三百五十余名が多くの職場に分かれ、一つ職場の同窓会とはいかないことです。もう一つは、会の最後に肩を組み母校の歌の数々? を歌うとき、高時代代の先輩は「セルリアンブルーは分からねえ」と言い、最近の若い人は古い歌を聞いたこともなく、締めりのない終宴になりかねないことです。それでも「翠樹影を浮かべては……」と歌い出すと、老若心が一つになり明日への気合が高まる集いとなっています。

(群馬銀行広報室長 61回)

●投稿 あれから四十年

鈴木 元一

(53回の鈴木元一氏より、本誌に高校当時を回想された御投稿がございました。当然、全文を掲載したいところですが、既に本号の原稿がほぼ集まった所で、スペースがございませんでしたので、概要のみ掲載する失礼をお許しください。)

今年、本校柔道部の長岡君が四国で行われた国体に出場しましたが、私も四十年前の昭和二十八年の、四国高松を会場とした第八回国体の柔道少年の部に三年生で出場しました。

昭和二十七年、県予選を経て、全国高校大会(於水戸市)に高松の柔道部は県代表として出場しました。これが第一回の全国大会で、当時のザラ紙のプログラムがまだ残っています。翌二十八年の第八回国体に、私も高松から出場することができました。監督は、この年高松へ赴任された今井孝造先生でした。

二回戦で惜しくも負けてしまいましたが、懐かしい思い出です。

(群馬県警察本部 総合交通センター 運転免許課 53回)



◇運動部◇

堂々、総体4位

柔道部の長岡、国体・総体全国大会

本年度の運動部報告の中で、特筆すべきことは、昨年の県総合体育大会、総合十一位から四位に躍進したことでないでしょうか。

その原動力となった部を次に紹介していきますが、中でも柔道部、長岡君の全国大会、国体出場が目立っており

ました。

各部とも、今年以上の好成績が期待できるレベルにありますので、OB諸氏の温かいご支援をよろしくお願い致します。

①県総合体育大会

②関東大会

③インターハイ予選

④全国高校総体

⑤国体

⑥県新人大会

⑦その他の大会

◎硬式野球

⑦春季大会

1回戦 高崎4-12伊商

夏季大会

1回戦 高崎1-7前商

秋季大会

1回戦 高崎1-6沼田

◎ラグビー

①2回戦 高崎5-9高商

◎サッカー

①1回戦 高崎18-0白根開善

2回戦 高崎0-2西邑楽

③1回戦 高崎3-1中央

2回戦 高崎3-0館林商工

3回戦 高崎2-2農大二

PK 2-4

⑦全国高校サッカー選手権群馬県大会

1次予選

1回戦 高崎8-0大間々

2回戦 高崎4-0渋川

代表決定戦

高崎2-0渋川

2次予選(11/6より)

◎陸上

①100m 今成 晃 10秒99 3位

400mリレー 今成 晃 43秒04 5位

②200m 今成 晃 11秒01 準決

400mリレー 予

⑦国体予選

少年A

100m 今成 晃 10秒86 2位

走巾 羽鳥修平 6m85 優勝

三段跳 馬場利幸 13m48 4位

800m 古橋隆寿 1分59秒86 6位

少年B

200m 羽鳥崇文 22秒55 2位

砲丸投 宮沢賢顕 12m11 2位

学校対抗

100m 今成 晃 10秒7 3位

200m 羽鳥崇文 10秒8 4位

400mリレー 羽鳥崇文 22秒6 6位

走巾 羽鳥修平 6m66 3位

三段跳 今成 晃 14m36 2位

棒高 牧野 崇 3m60 5位

走高 中島 晋 1m80 5位

◎水泳

①400mメドレーリレー 2位

400mリレー 3位

800mリレー 3位

200m個人メドレー 皆川 3位

百背泳 上岡 2位

学校対抗 3位

②200mバタ 小安貴弘 5位(県新)

⑥200m背泳 新井 3位

⑦関東大会予選

400mメドレーリレー 2位

400mリレー 3位

800mリレー 3位

百背泳 上岡 2位

200m個人メドレー 森田 2位

平成5年度高校総体全国大会(栃木・8月)



百バタ 小安 2位

◎山岳

①団体3位 関東大会3年連続

5回目の出場

(注、1、2位インターハイ

3、7位関東出場)

②順位なし

⑥個人 第3位 八木

◎バレー

①4回戦 高崎2-0太工

準々決 高崎0-2高北

③4回戦 高崎2-0伊勢崎工

準々決 高崎1-2太田東

⑦西毛地区大会 優勝

決勝 高崎2-0高北

◎テニス

①個人戦ダブルス

今井久夫・板橋マリオ組 準優勝

団体戦 ベスト8

⑥個人戦ダブルス

板橋マリオ・新井宏樹組 準優勝

シングルス 板橋マリオ 準優勝

◎バスケット

①1回戦 高崎104-12玉村

2回戦 高崎90-24吉井

3回戦 高崎58-49館商工

準々決 高崎59-44育英

準決 高崎55-59高商(第3位)

③2回戦 高崎90-22伊商

3回戦 高崎79-28高北

4回戦 高崎97-46下仁田

準々決 高崎54-49太田

準決勝 高崎52-64桐生(第3位)

⑦強化大会 第3位

◎卓球

①1回戦 高崎3-1長野原

2回戦 高崎0-3前橋東

個人4回戦進出(北村、福島)

③3回戦 高崎2-3沼田

⑦学年別大会

1年の部5回戦進出(北村)

◎柔道

①団体 3位

個人 大久保浩二 3位

中澤 徹也 5位

②ブロック予選 一勝一敗

③団体 3位

個人 軽量級 大久保浩二 第5位

軽中級 片柳 孝浩 第5位

中量級 永岡 祐一 優勝

軽量級 佐藤 幸弘 第5位

④個人 中量級 永岡 祐一 3回戦

⑤関東ブロック

群馬県チーム 第3位

永岡 祐一 国体出場

⑦県学年別大会

71kg級 北爪 隆行 第3位

86kg級 屋敷 延久 優勝

強化大会

86kg級 永岡 祐一 優勝

95kg級 佐藤 幸弘 第3位

◎空手

①団体型 8位

③団体型 5位

団体組手 8位

団体総合 5位

◎軟式野球

①2回戦 高崎7-5高商

3回戦 高崎3-0育英

準決勝 高崎1-4高工

③2回戦 高崎3-4前商

⑥2回戦 高崎7-0新田

◎ソフトテニス

①団体 ベスト8

③個人 内田・吉川 4回戦

松本・鷲塚 4回戦

団体 ベスト8

⑥個人 島田・鳥塚 5回戦

熊沢・岡本 4回戦

団体 第3位

◎弓道

①団体 6位

③ベスト8

⑦県民体育大会

団体優勝

個人優勝 飯野和男

<平成5年度職員異動>

※印は通信制

◎転任者

金井 秀一校長	退職
木暮 暢夫事務長	前商へ(総括事務長)
池之上昭義教諭	退職
田中 彰教諭	退職
田端 積教諭	吉井へ(教頭)
宮田 一男教諭	伊東へ
児島 修教諭	前橋へ
茂木 道弘教諭	富岡へ
堀田 徳昭教諭	退職 ※
松浦 行雄教諭	退職 ※

◎新任者

堀口 康平校長	富岡から
金子 喜市事務部長	前女から
関口 穂積教諭[数学]	富岡から
関根 正史教諭[社会]	富東から
田口 哲男教諭[理科]	渋川から
関口 理教諭[数学]	太女から
加藤 聡教諭[英語]	伊東から
安達 淳教諭[社会]	新任
代田 和年教諭[社会]	前商から ※
神田 直俊教諭[保体]	高東から ※

上信越高校弓道大会
個人優勝 飯野和男

◎剣道

①1回戦 高崎4-0館林商工

2回戦 高崎2-3高工

③1回戦 高崎4-1館

2回戦

高崎1-4高商

◎スキー

①回戦 46位 横田尚巳

大回戦 42位 横田尚巳

③回戦 42位 横田尚巳

45位 横田尚巳

⑦県高校春季大会

回戦 33位-柴田、35位-堀越

36位-横田

大回戦 32位-横田 46位-茂木

◇学芸部報告◇囲碁・将棋部

両部とも団体、全国大会出場

囲碁は、団体戦県予選に優勝し、第十七回全国大会に出場。(四年連続四回目)

しかも決勝戦は高崎のA・Bチームの対戦。三年生のAチームが優勝し、第二十九回全国大会出場。

一回戦会津高校に3対0で勝ち、二

回戦も静岡高校に2対1で勝って、三回戦に出場した。三回戦の相手は昨年の優勝校大分上野丘高校でこれには0対3で敗れたが、全国ベスト16位の成果を収めた。



第47回 高高・前高定期戦

部対抗	種目	一般対抗	
		高高	前高
水泳	3	6	
綱引	3	6	
ソフトボール	9	0	
駅伝	6	3	
入玉	6	3	
陸上競技	6	3	
バスケットボール	6.5	2.5	
バレーボール	5	4	
軟式庭球	3	6	
卓球	5	4	
硬式野球			
軟式野球			
剣道			
柔道			
空手			
弓道			
テニス			
サッカー			
ラグビー			
小計	66	18	
合計	52.5	37.5	
高高	118.5		前高

■高高・前高定期戦

第47回

二連敗後の大勝利

今年負ければ、高高校の三連敗という崖っぷちで臨んだ今年の定期戦であったが、終わってみれば118・5対55・5という記録的な大勝利であった。

「覇気がない」「盛り上がりがない」と言われ続けながらも本当に多くの人が練習に参加してくれた。特に三年生は夏休み、九月と補習に勉強に忙しい中、ほぼ完璧という所まで練習ができた。

習ができた。

さて当日だが、一般対抗十種目の内七種目に勝ち越し、当然三年生は大勝利、昨年は23点差をつけられ負け越した二年生は今年は16対14と勝利することができた。また運動部員が多く戦力的に苦しかった一年生も14・5対15・5と善戦した。部対抗でも総体四位の力を発揮し、66対18という圧勝だった。さらに応援でも、はるかに前高を上まわっていた。

最近の高高生は元気がなくなったといわれてきたが、決してそんなことはないことを証明できた今年の定期戦だった。(定期戦実行委員長 土反慶介)

最近の 進学状況について

平成五年の大学入試は、現役合格率七一・八%という過去に例のない成績をあげることができました。東大合格者も三年連続県下でトップでした。私大は、早大、慶応、上智(計九六名)明治、中央、東京理科(計一四九名)

などの健闘が目立ちました。先生方のきめ細かい指導とそれに応えた生徒達の頑張りがこの成果に結実したと言えます。

生徒は、学習のみならず、部活動にも全力を注いでいます。また翠巒祭や前高との定期戦にも熱中して、充実した高校生活を過しています。にもかかわらず運動部、学芸部に所属している者の現役合格率は七〇%を越えています

進路状況 (全日制) () 内は現役

大学	年次	3年	4年	5年	大学	年次	3年	4年	5年
北海道		14 (5)	12 (9)	10 (5)	青山学院		18 (7)	21 (16)	17 (8)
東北		21 (17)	31 (27)	19 (16)	学習院		7 (3)	10 (9)	12 (3)
茨城		2 (1)	2 (1)	2 (2)	慶応		42 (22)	54 (43)	35 (19)
筑波		5 (5)	8 (7)	4 (3)	国際基督教		2 (1)	2 (1)	3 (1)
群馬		28 (22)	47 (38)	38 (31)	芝浦工業		5 (4)	10 (10)	10 (7)
埼玉		7 (2)	7 (7)	12 (11)	上智		4 (1)	16 (11)	18 (9)
千葉		16 (12)	8 (3)	12 (8)	成蹊		6 (0)	5 (3)	3 (2)
東京		13 (7)	16 (15)	10 (7)	中央		23 (8)	35 (18)	45 (23)
東京外語		1 (0)	4 (3)	2 (2)	東京電機		16 (8)	11 (5)	9 (3)
東京工業		5 (3)	9 (8)	3 (2)	東京理科		37 (21)	56 (36)	48 (35)
一橋		1 (0)	4 (3)	5 (3)	東洋		7 (0)	13 (4)	16 (6)
横浜国立		10 (5)	12 (9)	10 (8)	日本		66 (27)	98 (44)	66 (42)
新潟		14 (8)	12 (10)	19 (15)	法政		20 (3)	30 (17)	34 (15)
金沢		2 (0)	9 (7)	9 (6)	明治		64 (30)	56 (22)	56 (23)
信州		2 (0)	5 (2)	1 (0)	明治学院		22 (5)	24 (6)	13 (5)
名古屋		3 (3)	2 (0)	1 (1)	立教		13 (3)	12 (3)	15 (5)
京都		6 (5)	7 (6)	6 (3)	早稲田		56 (24)	55 (24)	43 (23)
高崎経済		28 (14)	19 (8)	21 (19)	同志社		6 (2)	7 (2)	12 (4)
東京都立		4 (1)	2 (0)	4 (1)	立命館		12 (2)	15 (3)	17 (2)
横浜国立		6 (1)	6 (5)	4 (1)	その他		241 (59)	275 (79)	246 (105)

種別合計 (全日制) () 内は現役

大学名	3年	4年	5年
A 国立	198(114)	246(180)	186(137)
B 公立	41(16)	28(14)	31(22)
C 私立	618(210)	756(330)	695(323)
A + B + C	857(340)	1030(524)	912(482)
D 短大、各種他	9(4)	7(5)	1(0)
総数 (延数)	866(344)	1037(529)	913(482)
卒業生数	418	423	399
現役進学者数	218	276	282
現役合格率($\frac{\text{合格者数}}{\text{受験者数}} \times 100$)	52.9%	66.2%	71.8%

す。今年最高の合格率が実現した原因であり、本校の骨太の伝統が脈々と伝わっている感じがします。

来春の大学入試は、センター試験出願者が増加し、国立大学志向が強まるとともに、私立大学は合格者を絞る傾向にあり、依然として厳しい状況が続きます。この関門を突破するため、教職員一丸となって、生徒との信頼関係にもとづいた進路指導を進め、生徒全員が志望を達成できるよう努めたいと思います。

(進路部長 井本 嘉宣 56回)

● 翠巒文庫 ● BOOK

本校図書館の一面に翠巒文庫というコーナーがあります。これは本校の卒業生や、本校にゆかりのある方々が寄贈して下さった本を集めて展示し、在校生に利用させる場所であります。

現在(平成五年十月三十一日)までに四百三十三冊の寄贈本がありました。本年寄贈していただきました書名と著書を次に記します。

書名 著者

続・徐徐漂たかさき 内山信次 42回
未来をひらく人権 今村嗣夫 42回

風国少年(詩集) 高橋秀幸 69回
青き輝き(歌集) 天田 賢 44回
象のいた湖増補版 66回

山小舎 野尻湖発掘調査団
ふたりの聖徳太子 高崎高校山岳部 61回
関口昌春 61回

卒業生の著書を手にとってみることに
により、在校生の高高に対する愛着の
念も一段と増すものと思います。

卒業生の皆さん、著作等を、ぜひ後
輩の在校生のために、御寄贈下さい。

(図書部長 佐藤 照 53回)

平成5年度 同窓会経常会計決算

平成4年度経常会計

(平成4年1月1日～平成4年12月31日)

収入の部			
費目	平成4年度予算	平成4年度実収入	備考
前年度からの繰越金	352,485	352,485	
入会金	850,000	856,000	全日制405 通信制23
維持会費	5,500,000	6,732,000	
利息	50,000	87,755	
雑収入	1,000	12,000	
合計	6,753,485	8,040,240	

平成5年度経常会計予算

(平成5年1月1日～平成5年12月31日)

収入の部				
費目	平成4年度予算	平成5年度予算	前年費(増○減▽)	備考
前年度からの繰越金	352,485	226,055		
入会金	850,000	850,000		
維持会費	5,500,000	6,000,000	○ 500,000	
利息	50,000	50,000		
雑収入	1,000	1,000		
合計	6,753,485	7,127,055		

支出の部			
費目	平成4年度予算	平成4年度実支出	備考
会議費	900,000	682,553	平成5年総会補助30万他
祝賀費	700,000	584,886	ネクタイピン証書丸筒代等
饗別費	300,000	175,000	平成4年転退職員へ
慶弔費	100,000	100,000	葬儀花輪代等
通信印刷費	500,000	495,052	雑誌会費納入証書、宛名ラベル
旅費	100,000	56,000	京浜同窓会出席者等
会報発送費	1,400,000	1,256,328	会報発送郵送料
同窓会報費	1,500,000	1,410,000	会報編集・印刷費
事務費	400,000	368,540	人件費・事務用品代 他
同窓会長賞費	100,000	51,290	ガラス盾
補助費	300,000	300,000	図書館30万
雑費	50,000	34,536	返金等
予備費	403,485	300,000	翠樹体育会30万
合計	6,753,485	5,814,185	

支出の部				
費目	平成4年度予算	平成5年度予算	前年費(増○減▽)	備考
会議費	900,000	1,000,000	○ 100,000	
祝賀費	700,000	700,000		
饗別費	300,000	200,000	▽ 100,000	
慶弔費	100,000	100,000		
通信印刷費	500,000	600,000	○ 100,000	
旅費	100,000	200,000	○ 100,000	
会報発送費	1,400,000	1,400,000		
同窓会報費	1,500,000	1,500,000		
事務費	400,000	400,000	○ 100,000	
同窓会長賞費	100,000	100,000		
補助費	300,000	300,000		
雑費	50,000	50,000		
予備費	403,485	577,055	○ 73,570	
合計	6,753,485	7,127,055		

差引き残高 2,226,055
100周年基金へ 2,000,000
次年度への繰越し 226,055

平成4年度特別会計

収入の部	
繰越金	11,430,680
利息	513,494
合計	11,944,174

支出の部	
なし	

第92回高高同窓会
新年総会へのお誘い

同窓会々員の皆さまには御清
祥にておすごしのこととお慶び
申し上げます。

明年の新年総会は、私達63期
が担当させて頂くことになり、
本部や62期の皆さんのアドバ
イスの下、新年を飾るにふさわ
しい総会になることを願いつつ、
先輩諸兄の築いてこられた同窓
会の歴史に、微力ではありますが
が新たな一頁を加えることにつ
ながればと、はりきって準備を
進めております。

幹事会やクラス会を度々開催
して63期の意思の疎通は十分に
はかられておりますので、例年
通りの充実した新年総会になる
ものと確信いたしております。

総会には、同級生・お知り合
いをお誘い頂き御出席下さいま
すよう御案内申し上げます。

期日 平成六年一月二十二日(土)
時間 午後三時開会
場所 高崎ビューホテル
会費 五〇〇〇円
(当番期63回代表 関口茂樹)

◎事務局だより

◎同窓会は会員各位の納入して
下さる二千円の会費で運営され
ています。同封の振込用紙で納
入して下さい。

よろしくお願い申し上げます。

◎平成四年度に刊行された同窓
会会員名簿の残部はございませ
ん。次回の発行は一九九七(平
成九)年、百周年の年になりま
す。

なお、お電話での名簿の確認
やお問い合わせはしております
ん。その場合は、「高崎高等学
校同窓会名簿刊行委員会」(高
崎市八千代町二一四一)が郵
便で行いますので、御承知おき
下さい。

◎編集後記



たくさんの方の同窓の皆様に多大
の御協力をいただき、同窓会報
27号が発刊できました。御多忙
の中、貴重な原稿をお寄せいた
だきましてありがとうございます。
今後ともよろしくお願いしま
す。

(本部幹事会)